

# 小田原市スポーツ推進審議会

## 平成29年度第2回審議会概要

日 時：平成30年2月5日（月）午前10時から午前11時50分まで

場 所：小田原市生涯学習センターけやき 2階 大会議室

出席者：【委員】

江島会長、鈴木副会長、岡部委員、市川委員、小泉委員、山本委員、設楽委員、河戸委員、川向委員、佐藤委員

以上11名

※欠席委員：森委員、遠藤委員、宇佐美委員、志村委員、木村委員

以上5名

【小田原市】

関野文化部長、遠藤文化部副部長、尾沢スポーツ課長、草柳スポーツ課副課長、鈴木主任、畑主事、関主事

以上7名

司 会 本日は公私ともに御多忙のところ、平成29年度第2回小田原市スポーツ推進審議会に御出席いただき誠にありがとうございます。私は、本日の司会進行を務めさせていただきます、スポーツ課副課長の草柳と申します。よろしくお願いたします。

まず、本審議会は「小田原市スポーツ推進審議会条例」に基づき、委員定数の2分の1以上の御出席をいただきましたので、会議が成立することを御報告申し上げます。

なお、この審議会は、「小田原市情報公開条例」に基づき、公開することになっております。したがって、市民の方が傍聴される場合もありますので、御承知ください。また、会議録等の作成の関係で、この会議を録音させていただきますので併せて御承知ください。

### 1 あいさつ

司 会 それでは、文化部長の関野から開会にあたりまして、御挨拶を申し上げます。（関野部長が挨拶を行った）

次に、初めて会議に参加される方がいらっしゃいますので、事務局から紹介させていただきます。市川委員でございます。

なお、森委員、遠藤委員、宇佐美委員、志村委員、木村委員におかれましては、本日御都合により欠席されております。

それでは議事に移りたいと思いますが、進行は会長にお願いいたします。江島

会長、よろしくお願ひいたします。

## 2 議題

### (1) 30代～40代のスポーツ実施率向上について

江島会長 それでは次第に基づきまして進行させていただきます。

議題(1) 30代～40代のスポーツ実施率向上について、事務局から説明をお願いします。

尾沢課長 まず、私から本日の会議の全般的なことについて、御説明させていただきます。

本日の審議会の趣旨については、事前の資料送付の通知文の裏面にも記載させていただきましたが、昨年度策定した「小田原市スポーツ振興基本指針」の目標の一つとして掲げられた「スポーツ実施率の向上」を実現するための具体的な方策を、2つのテーマに沿って、本審議会委員の皆様からアイデア、お考えをお示しいただこうというものです。

御用意した資料については、委員の皆様からアイデアをいただくうえでの参考、あるいは御発言のきっかけとして御活用いただくものとして、本市の状況を説明する資料や他市の取組事例などを、御用意したものです。

よって、必ずしも個々の資料内容を、一つ一つ深く掘り下げて議論していこうとするものではございませんので、資料を説明した後は、委員の皆様にはアイデア等を御自由に御発言いただきたく考えております。

また、2つのテーマ以外でも、本市のスポーツ実施率の向上に繋がるアイデア等がございましたら、適宜御紹介いただきたく考えております。

どうぞ、活発な御発言を、よろしくお願ひいたします。

それでは、個々の資料内容については、スポーツ課の担当職員から御説明いたしますが、まずは、一つ目のテーマ「30代～40代のスポーツ実施率の向上について」の資料として用意いたしました、資料1～3の説明をいたします。

鈴木主任 資料1の小田原市民スポーツアンケートの結果について(抜粋)を御覧ください。こちらは、平成27年10月から12月までを調査期間としたアンケート結果のうち、30代～40代の結果について抜粋したのになります。

運動・スポーツを行わなかった一番の理由ですが、「仕事(家事・育児含む)が忙しい」となっており、忙しい仕事や家事・育児の合間でもできるスポーツが求められます。

次に、今後、行いたい又は行ってみたい運動・スポーツですが、一人でも行え、道具もあまり使わないスポーツでは、ウォーキングや体操、野外でのスポーツでは、サイクリングやハイキング、用具を使って仲間や相手と楽しむスポーツでは、テニス系の種目が人気となっています。

次に、運動・スポーツについての考えですが、「行いたいと思っはいるが、できない」と、意欲はあることが分かります。

次に、運動・スポーツをしている時間及び時間帯ですが、表のとおり、夜間帯が多い結果となっています。

次に、資料2を御覧ください。1枚目（表面と裏面）は横浜市のよこはまウォーキングポイントのチラシで、2枚目以降は平成28年度地方スポーツ振興費補助金の各市町村のウォーキングポイント等の取組事例です。

横浜市のウォーキングポイントは、18歳以上を対象に、参加者に歩数計がプレゼントされ、協力店舗・施設に設置されたリーダーに歩数計をのせると、歩数に応じたポイントが付与され、ポイントに応じて抽選で商品券等が当たる仕組みです。平成28年度「よこはまウォーキングポイント」利用状況調査報告書によると、参加してみたい理由の第1位は、「自分の健康づくりに役立ちそうだから」であり、どの年代でもこの理由を挙げた人が多く、健康づくりが幅広い年代にとって重要なものとなっています。また、参加してみたい理由の第2位は「歩くことで景品がもらえるから」となっており、男女とも年代が若くなるほど理由に挙げている人が多く、事業の特徴であるインセンティブは、若い世代へ有効であることが分かります。ただし、参加者数では、40歳代から50歳代の参加が少なく、「働く世代」に参加を呼びかけていくことや、歩数計の故障・紛失の問い合わせが増えていることが、よこはまウォーキングポイントの課題となっているようです。

小田原市でも、福祉健康部の健康づくり課を中心に、資料の4枚目5枚目の東京都清瀬市や相模原市のような健幸ポイント事業について検討しています。

次に、資料3を御覧ください。資料3につきましては、本審議会の会長であり、小田原市体育協会の会長であります江島会長からの提案となります。こちらの詳細につきましては、恐れ入りますが、江島会長からお願いいたたく存じます。江島会長よろしくお願ひいたします。

江島会長　それでは、資料3の「小田原市のスポーツ環境の充実を求めて」については、私自身の提案なので、私の方から説明します。これはあくまで、私個人の考え方を中心にまとめているので、市体育協会の考え方ではありません。これをなぜ作成したかという、これから小田原市の社会情勢が変化していくにあたり、スポーツはどのようなかたちで有効活用できるかを中心にし、また、市民の健康を考えたときに、スポーツは有効なひとつの手段ではないかの提案であります。

小田原市では高齢化が進んでおり、それから人口減少が起こっています。それと同時に子どもの出生率が低くなっており、小田原市の各小中学校を見ても児童生徒数が減少している状況です。そういう社会を想定した際に、小田原市の今の状況ではなく、人口を中心にして縮んでいく社会の中、どんなかたちで考えられるのか。また、テクノロジー的には、これからAIの時代ですので、それをどん

なかたちで小田原市が利用し、スポーツにどんなかたちで活用できるのか、そういう時代の中、今までの考え方にとらわれないことが大事であり、もちろん過去のことも大事にしていかななくてはなりません。新しい想像力が必要であると思います。それを踏まえたうえで、ハードとソフトの面を、どういうかたちで作っていくのが大事になる社会になります。

もう一つは、社会の中心になるのは人です。より良い人間関係を作るのには、スポーツが有効な手段になると思っています。施設もコミュニケーションを取れるような広場として活用していくことが必要になるのかと思っています。将来に向かって、小田原市がスポーツをどう考えていくのか、1ページの4にア〜クまで、必要なものをより具体的なかたちで挙げていきました。これを基にして、おおいに議論をしてもらい、具体的にどういうかたちで進展させるかが大事であると思っています。その取組について徐々にスタートしている状況にあり、この審議会の皆様から議論いただくうえでの提案であります。資料については皆様の議論に利用していただければと思います。

資料1から資料3の説明が終わりました。具体的な提案があれば、これからの議論の参考になりますので、皆様の活発な意見をお願いします。最初に、鈴木副会長から意見を伺いたいと思います。

鈴木副会長 会長の提案資料を拝見し、この提案はすべてのことが網羅されているので、我々としては、このことを中心にどう現実的に落とし込むかの検討をしていく必要があると思います。今までの考えにとらわれないで、想像的になっていくと思います。行政も含めて、草の根的に市民の運動を期待することもあると思います。両方向でいかなければいけないと思います。一つはトップダウンの考え方も必要だと思いますし、草の根的な、地元から或いは地域からのうねりのようなものと同時に、トップダウンの関係では、小田原市は文化部なので、そのことを活用しながら、会長の提案の内容の落とし込みをどう行うかを考えていくのではないかと思います。

ウォーキングポイントについて、横浜市は平成24年度から始めました。筑波大学の久野教授の施策の中で、全国で補助金が出るようになったのは平成28年度からになります。

小田原市も健康づくり課と連携を持ちながら、スポーツを楽しみとしての活動と、健康体力づくりとしての活動との組み合わせをどうしていくかが大事ではないかと感じています。横浜市の一日8,000歩ですが、ウォーキングだけでは健康寿命の延伸にはなっていないので、筋力をどう維持するかが大事であります。そこで、小田原市は起伏があり、ウォーキングには良いウォーキングコースが設定できると思います。

8,000歩の意味を解き明かすと、成人の平均の摂取カロリー数は2,200kcalであ

り、基礎代謝が1,300kcalとすると900kcalが残ります。仕事や軽労作をすると600kcalを使うので、300kcalが余剰カロリーとして余ります。この300kcalをこなすには、8,000歩では足りなく、だいたい一万歩ぐらいになるので、日本ではテロメーターという歩行計が万歩計になりました。自分の体の維持であれば、一週間に2,000から2,100kcalが必要という概念で、この8,000歩の理解を具体的にしてい

く必要があります。

平成28年度の地方スポーツ振興費補助金については、文部科学省のいつもの手法で、3年間の補助金で、総合型地域スポーツクラブについて、後ほど触れますが、全国で3,500あります。自治体は3,200から3,300近くあります。平成の大合併で地域が広がったので、まだ総合型地域スポーツクラブは3,500しかありません。1市に一つ程度しかありませんので、遠方だと通えません。今までの考え方にとらわれないのであれば、この補助金は二番煎じです。例えば、遠野市では大きな医療施設があり、平成28年度以前から健康の健に考えるで健考カンをやって、少しユニークさを出しています。伊達市の事業で大事な部分は、運動習慣化と日常的の二つです。行政、組織、団体が運動習慣の社会化をしていかなければならず、この審議会でも話したが、それが一つのキーワードであると思います。社会や組織、団体が、運動習慣の社会化をまちぐるみ、地域ぐるみ、或いは会社ぐるみで行わなければなりません。もう一つは個人が運動の習慣化を学んでいかなければなりません。この運動習慣化と日常的を二つの言葉で整理をしなければなりません。大田原市で言っている「独自の仮説」について、小田原市はスポーツのとらえ方を整理しましたが、例えば、市民スポーツアンケートの結果についての抜粋で、今後、行いたい運動スポーツの中にゆるやかなスポーツとあるが、特に道具や相手や規則や場所を必要としないスポーツであります。ゆるやかなだけでは分からず、競争がない、一人でできる、場所を選ばない、道具を必要としないとの説明が必要です。競技的なスポーツは、ほとんど道具が必要で、特に冬のスポーツであれば、すべて道具が必要で道具を使わない種目はありません。ゆるやかなスポーツの説明も含めて、独自の仮説を整理しなければいけないと思います。大田原市のプロジェクトは、「“参加する面白さ”に工夫を凝らした」とあり、コミュニティ活動の向上を図ったとありますが、おもしろさは交流がないと成立しない言葉です。人との交流だけではなく、自然と交流、ペットやモノであったりします。こんなところにも工夫を凝らすとよく、おもしろさは秘密の発見です。浦安市の「セーフティウォークナビ」とあるが、これはデサントが開発したソフトになります。このソフトは姿勢や歩き方を正すもので、これを入れてもスポーツ実施率を上げるにはつながりません。長く歩く際に怪我をしないよう情報を得るためのソフトです。むしろ、もう少し工夫をして、スポーツに取り組む材料を作らないと、今のところ自分は健康で体を動かすことに興味がない人が自分の体に負担を感じている方は興味があるかもしれない。そうするとフォームだけを気にするだけになり、本来スポーツは競技をするときに効率的に動くにはスピード

とフォームが関係してくると思うので、この辺に気を付けなければなりません。

神奈川県では、みなとみらい21で階段を登るなどをして、今年は2,000人を超えたとのこと。イベントはその時だけになるので、今までの考えとは違ったやり方はどうすればよいか、どこでもできること、誰にもできることが言われているが、今回の二つの議題は全国で課題になっている問題だと思います。考え方を整理し、違ったアプローチをしないと、全国の市町村が抱えている状態を解決していく方向にはいかないと思います。こういう機会に江島会長の提案を受けたので、小田原市はこれに向けて走る要素ができてありがたいと思います。

江島会長　それでは委員の皆様から御自由に御意見を出していただきたいと思います。

山本委員　30代から40代のスポーツ実施率向上について、非常にハードルが高いと思います。市民スポーツアンケートの回収率は34%とのことだが、30代から40代をターゲットにするのはどうかというのが率直な感想です。自分が30代、40代の時は、朝5時に起きて帰宅が23時の繰り返しで、時間があるとすると土曜日、日曜日ぐらいだが、土曜日、日曜日は自分の競技スポーツに時間を割いて行っていました。30代から40代で小田原市に就職している方は少なく、東京方面に通勤しているのではないかと考えると、スポーツ実施率を上げるためには、土曜日、日曜日を考えるしかないと思いますが、なぜ、30代から40代のスポーツ実施率向上をテーマの設定にしたのか、議論を深める前に確認したいと思います。

尾沢課長　30代から40代を選んだのは、特にスポーツ実施率が低いので、まずはこの世代のスポーツ実施率を上げる体制を構築し、また、この世代のスポーツ実施率を上げることで他の世代のスポーツ実施率を上げることの手がかりになるのではないかと考え、設定しました。

江島会長　30代、40代を考えるときに、子どもたちや高齢者も含めて議論になってくるとしますので御発言をお願いします。

小泉委員　おだわら駅伝競走大会の際に、40代の方から、自分がやっていた種目は子どもにもアドバイスできるが、やっていない種目はどうやって子どもに伝えてよいか分からないのが本音とのことでした。子どもと一緒に楽しめるイベントがあるとよいと言っていました。子どもを巻き込めば、親は子どもに夢中なので、数少ない40代の方が入ってくれるのではないかと思います。そのイベントも一回限りで終わらない、2年、3年にかけて、1年に1回としてもポイントが貰えるような、例えば、ツーデーレースも何年かけて完歩とするよう、ポイントを集めて、最後の何年かに景品を添えればよいのかとも思います。

その方は、スポーツに関してイベントがたくさんあることを知らなかったようで、小田原市体育協会でも行っているの、まずは参加してくださいと辛抱強く何回も言い続けていくのがよいかと思いました。

江島会長 小田原市体育協会でもキッズマラソンが親子とあるが、子どもも参加すれば、30代から40代の親も一緒にという感じがします。

設楽委員 江島会長提案の4の2の施設の使用の工夫について、小田原市は支所や公民館の統廃合で閉館する公民館がかなりあります。この支所や公民館を有効的に使っている層は、高齢者も含めて30代から40代が多いです。支所や公民館の講堂で軽スポーツや卓球ができる所が多いにもかかわらず、それを閉めるという考え方について、神奈川県内の他市町村に比べて、考え方が違うと思います。逆に、改修して運動しやすくするのが本来の趣旨かと思います。江島会長の提案と逆行しているので申し上げます。

用具や管理について、ニュースポーツ用具の貸出が平日の9時から17時だと誰が借りられるのか、このことは撤回されたが、これが出ること自体、末端に普及しようという考えがないと思います。30代・40代は遠方に通勤しているので、平日は行くことができません。土曜日か日曜日しか行けないので、原則として平日という文章が出ること自体、30代から40代をまったく考えていないと思います。

酒匂川スポーツ広場は、非常に混み合っており、ほとんど車で来ますが駐車場がなくてトラブルが起きています。河川敷ではあるが、グラウンドとして使用していないところを駐車場として開放するなど、何か工夫することも考えていただきたいと思います。

県立諏訪の原公園についてはほとんど活用されていません。県立諏訪の原公園の職員によると、県立ではあるが活用されなくて困っているとのこと。なぜ市と県で調整してうまく活用できないのでしょうか。何か活用してくれないかと県立諏訪の原公園の職員から打診があり、スポーツ推進委員で検討しようとしています。県の施設も含めて、市とタイアップして有効活用できるもの考えると、もう少し普及できると思います。

鈴木副会長 今日議題は全国で課題になっています。スポーツはどこかの場所に行って何かをするという概念が強くて、オリンピックがあるとまた、「みるスポーツ」に偏重していくのではないかと懸念しています。「するスポーツ」と「みるスポーツ」が違うという概念を提供しないと、特別に訓練している人たちが出てくるということになります。「仕事でできない」という言い訳ではなく、どうしたらできるかを伝えていかないといけないと思います。今、車で来たが分散して、どこからは歩いて行こうかといった、何か工夫を一人ひとりがやっていかないと、スポーツ

はその場所での取組だけではないということを示さないと30代から40代のスポーツ実施率向上の解決にはならないと思います。この工夫は、行政の工夫と、団体の工夫と、個人が考え方を変えていくような広報を小田原市が取り組む方法として出していけないといけないと思います。

子どもたちは黙っていても遊ぶ中に運動が含まれています。高齢者はそこを意識しないと、時間はあるが、昔一生懸命働いていて、今さら体を動かすなんてという概念が残っていると思います。

子どもたちが、仲間で遊ぶ、外で遊ぶ、中で遊ぶがなくなって、体を使うことがなくなってしまいましたので、考えないといけないと思います。高齢者も元気な人がいれば、周りを巻き込むような、そういう人たちに、スポーツ推進委員がコーディネーターのようになっていただいて、地域でまちを歩くといった、概念的な工夫をしていかないと30代から40代の解消は難しいと思うので、歩行できるような道を整備するなど、トップダウンから考えることも、また、市民から考えてもらうこともあるのではないのでしょうか。

江島会長      よい提案が出ましたが他にはいかがでしょうか。

川向委員      30代から40代は全国調査のスポーツ実施率をみても、必ず一番低いです。30代の方も年を老いていくときに、生活習慣の中に運動をできるだけ積極的に取り込むことが必要なので、この発想をしていると思います。

30代、40代に活動の素材を、何をするか、それから場所、時間、指導、特に人間関係が大事で楽しさはどこから、人間の動物の本能からくるものです。相手を受け入れるか受け入れないかで、受け入れられると危険因子がなくなり、楽しい・安全という意識が脳から入ってきます。喜怒哀楽の感情の部分が楽しさにつながります。人間は一人で生きていけない動物と言われているので、人とうまくいっているときは楽しく決まっています。30代から40代の方でも、誰とどこでいつやるか、一人の感覚とそこに口を利かなくてもいるだけでも感覚は違ってくると言われています。誰もいないところで歩いているのと、知らない人と一緒に歩いているだけで仲間になれると何かを感じています。

忙しいのであれば、特別にスポーツの時間を作らなくてもよいと思います。通勤するときに、万歩計を配って、常に付けてもらい、少し早歩きする意識が必要になります。ただ歩いているのではなく、「ここから駅までウォーキングする」、早歩きすると意識をさせることで、刺激させるとよいと思います。データを取り、申告し、御褒美をあげるといったことができるとなおよいです。自己申告で数値を計って数値が上がったなど、何かその人にとってメリットになると、この年代の人たちに無理なくできるのではないかと思います。

佐藤委員      ウォーキングのポイントで万歩計を使う話があったが、スマートフォンのアプリ



また、スポーツ推進委員では、小田原市26地区を6つのブロックに分け、ブロックごとにも活動をしております。今年度のブロック活動につきましては、資料4の3枚目にあります、平成29年度ブロック予定表を御参照ください。

また、地域におきましても川東地区グラウンドゴルフ大会や上府中世代間交流ハイキングをはじめ、スポーツ推進委員が中心となって地域イベントの開催、協力をし、地域のスポーツ振興の推進を担っております。

こうした地域におけるスポーツ推進のための実技の指導、事業の計画や連絡調整、地域住民や行政、スポーツ団体等の間を取り持つ等のコーディネーターとしての役割が期待されております。

以上で、資料4の説明を終了とさせていただきます。

畑主事

続きまして、資料5を御覧ください。

総合型地域スポーツクラブとは、人々が、身近な地域でスポーツに親しむことのできるスポーツクラブです。「総合型」とは3つの多様性のことを示し、1つ目が子どもから高齢者まで多世代で参加できるという「年齢の多様性」、2つ目が様々なスポーツを愛好する人々が多種目に取り組むことができる「種目の多様性」、3つ目が初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる「技術レベルの多様性」です。また、地域住民により自主的・主体的に運営されるスポーツクラブです。

現在、神奈川県では91のクラブが設立されており、小田原市では、平成19年2月に「小田原フレンドリークラブ」が、平成20年6月に「城下町スポーツクラブ」が設立されました。

小田原フレンドリークラブは野球を中心に、アーチェリー、グラウンドゴルフ、スポーツ吹き矢、カヌー、ヨガを主に取り扱っており、酒匂小学校、酒匂中学校、富士見小学校、酒匂川スポーツ広場を主な活動拠点としております。小中学生が約40名、一般の会員が約60名で活動しております。

また、城下町スポーツクラブは「小田原市・足柄下郡スポーツ指導者協議会」が母体となっており、バドミントン、卓球、エアロビクス、ソフトテニス等を取り扱っています。主な活動拠点として、小田原アリーナ、小田原テニスガーデン、東富水小学校体育館及び小田原駅付近の三の丸小学校で活動をしています。会員の構成は小学生が約220名、一般の会員が約120名で活動しております。また、障がい者スポーツにも力を入れており、現在5名の方が公益財団法人日本障がい者スポーツ協会公認初級障がい者スポーツ指導員の資格を取得しております。

小田原市スポーツ課の総合型地域スポーツクラブへの支援といたしましては、活動場所の確保として、活動施設の優先予約、広報誌への会員募集記事の掲載、市内小学校へのチラシ配布などを行っております。資料5の3枚目は、今年度の5月上旬に市内小学校全児童に配付した体験会のチラシになります。しかしながら、全国規模のスポーツ大会などが集中する夏の時季などは優先的な会場の確保

は難しく、また、平成27年度に実施いたしました、「小田原市民スポーツアンケート」の結果では、総合型地域スポーツクラブを「知らない」が87%という結果から、活動場所の確保、市民の認知度などの課題点が見受けられます。

その他の総合型地域スポーツクラブ支援事業といたしまして、市内団体が行う研修会等への講師派遣を行っております。

続きまして、資料6を御覧ください。学校開放について説明させていただきます。

小田原市では地域住民の社会体育の普及振興を図るため、学校施設開放事業として、市内26の小学校及び11の中学校の体育館を開放しております。

使用料は無料となっており、使用可能な時間帯は平日の午後5時から午後9時30分まで、休日の午前9時から午後9時30分までとなっております。

お配りいたしました資料6は「学校開放登録空き状況」です。×印は既に活動している団体があり埋まっていることを示し、時間帯が記載されているところは、まだ空いている状況です。平成28年度は287団体に御利用いただき、延べ187,847人に御利用いただきました。

草柳副課長 続きまして、資料7を御覧ください。地域コミュニティですが、小田原市には地域コミュニティ組織があります。

今の小田原市になる前に、昔の村、町などの名残で、小田原市は26の自治会連合会がございます。資料7の左側の地区名がそれです。それぞれの地区で、地域の課題について、行政と一緒に連携を組んで課題解決に取り組みましようということで、地域コミュニティ組織を立ち上げています。資料7の右側の主な取組にウォーキングやハイキング、小学生レクリエーション大会、ラジオ体操、グラウンドゴルフといった26の地区のうち、8つの地区でスポーツに関する取組を行っています。

江島会長 スポーツ推進委員について、設楽委員で何か付け加えることはありますか。

設楽委員 昨年9月から障がい者スポーツとして、ボッチャの普及を始めました。26地区のほとんどでボッチャの講習を行いました。参加者の意見を聞くと、用具が少なすぎるとのことでした。用具を小田原アリーナまで借りに行くのではなく、各公民館単位に置いてもらえればもっと活用できます。

運動できる人は競技スポーツを行うが、運動できない人や高齢者は車いすが多く、そのような方がボッチャをやりたいとのことでした。

江島会長 城下町スポーツクラブについて、特にありませんか。

佐藤委員 私は卓球を教えているが、参加者は60代から70代の高齢者が非常に多いで

す。小学生も教えているが、技術的なことではなく、スポーツを楽しむことを教えています。

活発に活動していますが、知らない人が多いのが現状です。小田原アリーナに行けばチラシがあるが、他には置いてありません。

また、月に1回行っているスポーツコミュニティですが、今以上人数が増えると県立西湘体育センターでは場所的に狭い状況です。

会費について、子どもから月1,500円取るのはどうかとは思いますが。

鈴木副会長 ジョンソン&ジョンソンの社会貢献事業で、クルージングのプログラムがあり、その中でペタンクをしました。船の中だとペタンクは転がるので、学生と工夫して同じ色のお手玉を作りました。転がらないので、まさにポッチャのようになりました。既製のスポーツを追いかけるのではなく、どうしたらできるかを考えるとよいと思います。体が動かなくても競争できる、勝負のおもしろさを味わえる意味では、ポッチャの既製品の高いボールがなくても、転がらない程度のお手玉を作るとポッチャができます。そのようなことを考えるとこれからは違うのではないのでしょうか。

江島会長 小学校には紅白球がたくさんあります。

山本委員 先ほど、設備、場所、時間についてありましたが、スポーツをしていない人が小田原アリーナに行くとうなるかを考えました。総合案内に置いてあるパンフレットを見ると、総合的に情報がありません。個々の情報はあがるが、まとまった情報がありません。30代から40代の方が、スポーツを試みようと考えたときに、土曜日、日曜日にはできるかというところ、トレーニングルームしかありません。土曜日、日曜日は、全国を含めた競技団体が年間利用調整をして、すべての土曜日、日曜日は埋まっています。一般の方が入る余地はありません。

実際にスポーツをしている方たち、特にフットサルの方たちが楽しもうと仕事が終わって来ても午後9時30分で退館なので、午後8時に着いて、1時間できるかできないかとなります。人件費の問題が出てくるが、例えば午後10時までできるとすれば、もう少し違うのではないのでしょうか。

また、自分時間手帖のスポーツを開くと、スポーツに関して11の情報しかありません。ただし、ダンスは40ぐらい掲載されていました。こういった情報誌にスポーツ情報を提供することも一つの手段ではないかと思えます。

鈴木副会長 総合型地域スポーツクラブは、2000年にスポーツ振興をするという大臣告示を出し、このときは総合型地域スポーツクラブという名称はなく、ドイツのスポーツクラブの真似をしようと思いました。現在、ドイツでは10万を超えるスポーツクラブがあり、商業スポーツや興行ではありません。先ほどの子どもが毎月1,500

円を払っていいのかという問題がありますが、会員制のスポーツクラブや商業スポーツクラブと変わりません。これは、特定の人が会員として運営しているクラブに、行政が税金を使うわけにはいきません。26地区に1つのクラブができるとよく、種目の多様性、年齢の多様性、技術レベルの多様性と言っているが、運動内容の多様性が考えられていません。楽しみのスポーツが中心になっていて、自分の健康も含めて、それをカバーするスポーツ種目としてやるという概念にはありません。例えば、A地区の住民にすべて網をかけるかたちで、会員であるとかないではなく、ここの住民はスポーツクラブに所属していると、こちらが考えることが必要です。例えば、バドミントン教室を行う際に受益者負担として、いくらかのお金をもらうということであれば、行政からの補助も出やすいと思います。受益者負担として、その地域の補助として出すということができると思います。したがって、ドイツ型を日本でやろうと思っても、日本では商業スポーツが主流なので無理があります。

また、一番の欠点は総合型地域スポーツクラブが自分たちの活動場所を有していないことです。場所がないのに活動しなさい、補助金も創設後3年間だけとなると進まないと思います。

学校開放登録しないと利用ができないのは当然のことであり、管理側からすれば、ガラスが割れたらどうするかなどもあります。住民が組織でどうしたらよいか、相手側が満足するようなことを住民が考えないといけないと思います。

総合型地域スポーツクラブは3,500を超えているが先が見えません。元々、青写真ができていないからです。スポーツ振興は、厚生労働省が健康日本21を出した際に、文部科学省が急遽考えたことであり、スポーツ実施率は文部科学省が行ったデータではありません。内閣府のデータなので、30分週1回に散歩も入っています。散歩を運動とするかということもありますが、文部科学省が考えたスポーツ実施率では30分週1回の運動と言っています。実施率が37.2%から44%になりましたが、良いところのデータだけが出てきています。実際に、30代、40代は、まったくそこに手が付けられていません。

小田原市は総合型地域スポーツクラブをやめる必要はありませんが、それだけでは立ち行かないということで、再考する必要があると思います。

設楽委員 各地区でのスポーツクラブについて、実際には26地区の体育振興会、体育協会があり、年に何回かは登録なしのフリーでその地区の方が参加できるニュースポーツを行っています。それを発展させればという話だと思いますが、地区の中で施設が取れば、それができます。学校開放はほとんど登録クラブで埋まっており、グラウンドも一つの小学校で15ぐらいの団体が登録していて、空きがありません。できないからやらないのではなく、できるようにしないとけません。スポーツ推進委員でも課題として考えていきたいと思っています。

鈴木副会長 学校のクラブ活動の指導者も大きな問題です。学校の教室の一つを借りる可能性もあると思います。これから部活動をどうするか、地域が学校をどうするか連携を取ればまた違ってくると思います。

山本委員 施設の問題における、小田原市の公共施設や学校以外で、民間企業と提携しながら使うことについて、旧DNPの工場があり、市議会議員にグラウンドや体育館を使えるように働きかけてほしいと伝えたところ、市として民間企業に働きかけることはできないとのことでした。今現在、工場は無人であり草が伸び放題となっているので、子どもや親たちが、そこで活動すれば草は生えてこないと思います。ただし、人がいないので、警備や電気、鍵の問題があります。そこは工夫でできるのではないのでしょうか。問題は市の努力ではないのでしょうか。

鈴木副会長 平成29年4月に社会福祉法の改正があり、社会貢献が義務化されました。そこで、理事長を務めている社会福祉法人の介護施設で4月から月2回、地域の方に無料で運動ができるよう開放します。会社も地域にいれば、地域貢献、社会貢献、会社の義務とまでは言いませんが、一つの道だと思います。会社などの体育館も朝から使用されているわけではないと思います。関東学院大学法学部の体育館も学長に申し出れば使えるのではないかと、荻窪地区の方に声を上げてもらえればと思います。

江島会長 今までのものに縛られるとあの場所は使えないと先に出てくるのではなく、そこを使うためにどういう努力をするかが大事になると思います。その希望はあくまで市民のためということもあり、市民がスポーツを楽しみ、健康を維持していく中で、工夫ができるだろうと思います。

市内を歩いていると、空いているところはかなりあります。なぜ公園などが使えないかというと、条例で規制や使用制限があると言われる。しかし、それを時代に合わせて変えていくべきものであり、そういう努力をどうするかが大事であり、様々なかたちで工夫をすればということが出てくると思いますので皆様の意見をお願いします。

川向委員 指導者養成を根本的にしないとスポーツ人口は上がらないのではないのでしょうか。スポーツ指導者のリーダーシップのあり方です。スポーツは種目の発展が従来の考え方で、スポーツを狭義でとらえるか広義でとらえるかによって違います。種目でとらわれない人間の動きからスポーツをとらえていかないといけません。指導者自身も今までスポーツ＝種目で、この種目に興味がある人が集まってそのスペシャリストが指導するというかたちで、スポーツ種目のスキルやルールが主眼になっています。ここが欠けていると思う点が、根本的に人間を対象にしていることだと思います。人間がどういう生き物かを理解した中で、並行して技術

レベルも指導しなければならないが、ホモサピエンスはどういう動物なのか、感情の問題や人間はどういうことが楽しいのか、人間の本来持っている姿を指導者が把握していると、同じ技術を教えるにも言葉の使い方や人と人との関わり方、そこに至るまでの間の人と人とのコミュニケーションの中で自然に覚えていくような投げかけができると思います。指導者の描いている最高目的をただ伝える方法と、考えて自分たちで思考して楽しさを見つけ出してそこに到達させる方法とでは違うと思います。参加者一人ひとりがどういう人たちで、その人たちにどのように声かけをすれば、その人が楽しんでできるのかの視点に立った指導者がどれくらいいるのかということと少ないと思います。

小田原市がスポーツ人口を増やす際に、スポーツが嫌いな人がほとんどなので、嫌いな人をどうするか、そのために人はどういったときに喜びを感じるか、体を動かすと楽しいと思わせる瞬間が何なのかを、指導者自身が基本に戻り、人間を対象にしていることの指導ができる指導者を養成していかないと変わらないと思います。

市川委員 県立体育センターのスポーツ推進班に勤めていた際、埼玉県が通勤で一駅歩くというキャッチフレーズを考えられて、推奨していました。周知の仕方は中吊りが有効のようです。大雄山線や小田急線で中吊りを使って活動を周知することやスポーツ実施率の経年比較が必要なので、新たな視点のアンケートを取り入れ、この世代のスポーツ実施率や健康に関する意識付けをすれば変わってくるのではないのでしょうか。

地域の要望について、学校も協力しようとしているので、自治会の活動や地区体育振会、体育協会の意向があれば、学校の子どもたちの活動に支障のない範囲で開放の協力をさせていただいていると思います。城北中学校では、地域の健民祭がスポーツフェスティバルというかたちになり、多種目を経験するかたちとなっていますので、そういうものも派生をしながら地元の活動も盛んになればよいと感想を持っています。

中学校の支援級が積極的にボッチャに取り組んでおり、各中学校にもボッチャが1セットあるので、声をかけてもらえれば貸し出すことも可能と思うので、学校を活用いただきたいと思います。

河戸委員 30代、40代のスポーツ実施率について、自分自身の健康をどうするかよりも子どもたちをどうスポーツさせるかを土曜日、日曜日に取り組んでいます。サッカーをしていますが、上府中公園に行くこともあり、場所を探すことからやっています。引っ越し際、どこに住もうかを決めるときに決め手となったのは小田原アリーナでした。小田原アリーナで運動を行っているとのことで、選択しました。土曜日、日曜日の過ごし方ですが、小田原アリーナではスポーツの試合をかなりやっていて、見に行くと、子どもたちと「あれできたらいいね」と言ってい

ます。例えば、高校生の試合の後に、高校生がボランティアで子どもたちと一緒にスポーツ体験ができる時間が設けられていると家族で参加するかと思います。キッズ相撲大会やパラリンピックのバドミントンの選手が来た際は参加をしています。その際に困るのが昼食です。例えば、チームや団体に所属していれば、唐揚げが一つサービスで貰えるのであれば、参加して行くと思います。

アプリについて、例えば、父親や母親が10万歩歩いたら景品が貰えるなどがあればやろうと思います。

自分自身の健康をどうするかよりも子どもたちにスポーツをどう取り入れて健康づくりをしていくかと思っています。

江島会長 皆様から御意見をいただきましたが、これをまとめて次の議論につなげていきたいと思っています。できれば具体的なものは実施や実行できるようなかたちで議論を進めていければと思います。先ほどもありましたが、お金のかかることではあるが、将来を見据えたうえで、どんなかたちで叶えるかということも大事だと思います。いろんなところで今のような議論ができる体制をまず作っていきたいと思います。またそれを実行できるような行政的なことについてお願いしていきたいと思っています。以上で本日の議題を終了します。

司会 本日は、長時間に御意見をいただきまして誠にありがとうございました。  
これをもちまして、「平成29年度第2回小田原市スポーツ推進審議会」を終了いたします。